

# カトリック 仙台教区報

No.257

2025年3月1日

発行：カトリック仙台司教区  
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12  
Tel. (022)222-7371 Fax. (022)222-7378  
発行責任：仙台教区広報委員会  
URL <http://sendai.catholic.jp/>



カトリック仙台教区 教区長 ガクタン エドガル 司教

## 聖年 2025年 年頭書簡「駅伝」

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

新年のご挨拶を申し上げます。神が、豊かな恵みを注いでくださり、皆さんが日々平和のうちに過ごされ、神が、皆さんの祈りを聞き入れてくださいますように。

私は聖年である2025年の年頭書簡のタイトルを「駅伝」といたしました。新年に行われる有名な「箱根駅伝」や、日本にはその他多くの駅伝がありますが、一本のたすきをつなぎながら選手が走るように、私たちも信仰のたすきを次代につなぐために、指定巡礼所をこの一年の間に出かけましょう。実際、私たちの生涯は巡礼です。

私は、各地区に指定巡礼所を定めました。それは、弘前教会、四ツ家教会、米川教会、元寺小路教会、野田町教会の五つの教会と、大籠殉教地と広瀬川殉教碑です。

その指定巡礼所の一つ大籠殉教地を、前回訪れたのは昨年3月3日でした。その日、大籠に近い長徳寺を訪れる機会がありました。岩手県一関市藤沢町

の時宗の寺院・長徳寺の住職である渋谷真之師のお招きを受け、お寺の行事に参列しました。住職と挨拶を交わすと共に一枚の写真を贈りました。それは、私が2023年9月7日に教皇フランシスコに、住職から教皇に宛てたキリシタン殉教者記念碑についての手紙を差し上げたときの記念写真でした。(世界新司教の研修会に参加するため一昨年一週間ローマにいました。)長徳寺の訪問後、信仰の先輩たちの信仰の旅を考えながら、大籠殉教地に祈りに行きました。

仙台教区のもう一つの指定巡礼所は、1624年2月22日、広瀬川の水牢の柱に縛られ殉教したポルトガル人イエズス会司祭ディエゴ・カルヴァーリョ神父と8人の日本人信徒を記念する広瀬川殉教碑です。私たち仙台教区は、昨年2月23日、福者ディエゴ・カルヴァーリョ神父と同志の殉教4百年を記念するミサ・殉教祭を行いました。技能研修生として東北で働いている数人のベトナムの若者たちもミサ・殉教祭に参加しました。私は、説教の中で日本を追放されたカルヴァーリョ神父が密かに日本に戻るまで1年間をベトナムで過ごしたことを語りました。カルヴァーリョ神父の殉教記念は、世代と地理の距離を埋めてくれたような感じがしました。

江戸時代には、東北で約 1000 人ものキリシタンが殉教者として亡くなりました。福者ペトロ岐部は、東北で何年も宣教司牧した殉教者でした。忘れてはならないもう一人のキリシタンは後藤寿庵です。彼が殉教したかどうかは不明ですが、彼が洗礼を受けた長崎で学んだ技術を用水路の工事に駆使していました。今日に至るまで水沢の人たちは、後藤寿庵を尊敬しているのです。

大籠と広瀬川訪問の話が時代錯誤と聞こえ、私が過去にとらわれた人間だと思われるかも知れません。しかし、過去を思い起こすことは、必要です。歴史家エドワード・ハレット・カーの「歴史とは、現在と過去の継続の対話である」という言葉があります。実際、私たちにとって祈りとは、歴史の原点である神との対話です。祈りは、私たちを前進させます。

私たちが日曜日ごとに記念する感謝の祭儀・「ミサ」は、2000 年以上前に行われた「最後の晚餐」にさかのぼるのです。私たちは、イエス・キリストが受難に向かう前、弟子たちとなさった食事を主の記念として行なって、主の命がけの行為を追憶し、「主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。再び来られるときまで」と唱えます。ミサの終わりに、私たちは、ミサで新たに受けた主イエスの福音を告げ知らせるように遣わされます。私たちキリスト者は、過去にとらわれた人ではなく、前向きな民なのです。

仙台教区の歩みの前進のために、私は、2024 年の年頭に、ある課題について皆さんに話し合うよう、呼びかけました。みなさんの実践または希望としての答えを 2024 年 9 月 23 日に開かれた仙台教区宣教司牧評議会定例会や他の機会に聞きました。

2024 年 9 月 23 日に会議を開いた仙台教区宣教司牧評議会定例会ですが、この会議は司教諮問機関の一つで、総代理、事務局長、地区長、各地区の信徒代表、修道女会代表で構成され、年に一回定例会を開きます。私は、今回の会議の目的を開会挨拶で次のように述べました。

2024 年の年頭書簡に書いたように、私は「小教区」を畑に例えて、私たちは小教区をどのように世話をしていくべきなのかなど、と問いました。この問いへの回答を一緒に考えていきたいと思えます。本日の作業として、先に、各地区代表からの報告を聞き、小教区・ブロック・地区の近況を見ましょう。次に、第二バチカン公会議において教会が示す道筋を新たに知っておきましょう。最後に、一人ひとりの声に耳を傾け、聖霊の導きを受けて、この道筋に

沿う福音宣教に奉仕する小教区を描きましょう。

皆さんの私の問いに対する答えをいくつか挙げます。それは、司祭が主日のミサができない場合、信徒たちと「ことばの祭儀」を一緒に準備すること、主日に複数の小教区共同体がミサを行うこと、司祭が常駐していない司祭館を信徒が交代で開き、信仰について分かち合う機会を持つこと、挨拶をするよう意識的に努力することといった答えです。

宣教司牧評議会定例会の結論をまとめるのは難しいのですが、繰り返し出ていた言葉をヒントにするならば、教区の優先課題は、「コミュニケーション」そのものです。「小教区は人々を結びつけ、長期的な個人的な関係を育み、それによって人々に帰属意識と必要とされているという感覚を与える場所でなければならない」、定例会で受けた講話のその一言が、私の心に響いています。

2024 年度の宣教司牧評議会定例会から提案や質問を受けて、また、仙台教区の司祭たちとの対話や小教区訪問の際に見聞きしたことを踏まえ、私たち仙台教区民が、2025 年の間、特にカトリック教会の典礼に関する理解に力を入れて行くことを目標に前進しましょう。

教会が常に守ってきた基本的な教えがあります。それは、「祈りの法は、信仰の法、生き方の法」という教えです。つまり、私たちの祈りが、私たちの信念を表現すると同時に私たちの祈りが私たちの信念を形成するのです。教会の祈りが神聖なものであり、真実であるような教会で育ったならば、私たちは、その祈りの内容を信じ、それを実践するでしょう。

この方向性の具体化としては、私たちが典礼の意味を知り、典礼をよく準備することに力を入れてまいりましょう。「ミサ」と「ことばの祭儀」の位置づけなどに関する質問に対して、答える者によって回答が異なる、このような懸念をいろいろな機会に耳にしました。こういった問いかけに対してじっくり答えていきましょう。

ヘブライ人への手紙の 12 章に次の言葉があります。

<sup>1</sup> こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、<sup>2</sup> 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。



この言葉を読むとき、箱根駅伝で選手が走る沿道には、多くの応援する人で埋め尽くされている様子を想像します。つまり、スタートからずっと続いて何世代もの信仰者たちが、信仰において成長し成熟していく中で、あらゆることに忍耐強く耐えていく私たちに応援してくれているのです。

世代によって、歴代のキリスト者が直面する課題は、異なります。私たちは、宗教的迫害を受けていませんが、今日の試練はさまざまです。家庭内の価値観の対立、別れる寸前の結婚生活、性別指向に対する無理解、職場での難しい人間関係などなど。こういった現実の中で、「希望はわたしたちを欺くことはありません」(ローマ5・5)。これこそ、聖年のテーマです。

2025年の聖年のための書簡で、教皇フランシスコはこう語られています。

巡礼が、聖年のすべての行事の基本要素であることは偶然ではありません。旅に出ることは、人生の意味を探し求める人の特徴です。徒歩巡礼は、沈黙、苦勞、いちばん大切な物事、それらの価値の再発見に大いに有益です。

聖年の間、仙台教区の巡礼所を訪問し、皆さんと共に祈りと会話に満ちたひと時を過ごしたいと思えます。

共に歩む巡礼者の一人  
+ガクタン エドガル

2025年1月1日  
着座三周年の年頭書簡



## 2025年 通常聖年「希望の巡礼者」開幕

教皇フランシスコは、2024年5月9日「主の昇天」の祭日に、2025年の聖年を布告する大勅書「希望は欺かない」を発表されました。仙台教区では、2024年12月29日(日)聖家族の祝日に、ガクタンエドガル司教主司式で荘厳な聖年開幕ミサがささげられました。

大聖堂の入り口には、聖年の扉が作られ、ガクタン司教を先頭に大きな十字架と司祭団、奉仕者、信徒が巡礼を象徴するように行列を作り入堂しました。大聖堂に入ると、司教が十字架を掲げ、洗礼盤の前で洗礼を記念する式が行われました。その後会衆に灌水し、感謝の祭儀へと続きました。

ガクタン司教は説教で次のように語られました。

主の御降誕のお喜びを申し上げます。先ほど朗読していただきました福音箇所(ルカによる福音書2:41-52)に登場されたイエス様は、もう12歳です。よくご両親に迷惑をかけていた子でしたね。しかし、福音箇所は、「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」で終わりました。これは、ルカによる福音の1-2章の締めくくりです。ルカによる福音の1-2章は、イエスの幼少期を語る箇所です。続く章には、洗礼者ヨハネが登場し、イエスは人々と肩を並べて、このヨハネから洗礼を受けました。

今日の福音箇所、今日の式の言葉、教皇フランシスコの大勅書「希望は欺かない」の幾つかの言葉の照らしを受け、二つのテーマを持って、私たちの信仰の歩みを受けて黙想したいと思います。



先ほど、カテドラルの前で、私は導入の言葉として、みなさんにこう呼びかけました。

「皆さん、ナザレの聖家族の愛の交わりの中で育まれた救い主イエス・キリストの受肉の神秘は、私たちにとって、深い喜びと確かな希望のよりどころです。(略)この式は、私たちにとって、恵みといつくしみの豊かな体験への序曲です。」

序曲とは、オペラやオラトリオ、組曲などの最初に演奏される楽曲で、全体への導入の役割を果たします。英語のpreludeはフランス語の原語を英語にしたもののようです。オペラでは、幕が上がる前に「序曲」や「前奏曲」が演奏され、これから始まるドラマの予告の役目を果たします。序曲の類義語には、「オーヴァチュアー」「導入部」「前奏曲」「序奏」などがあります。

オペラやオラトリオの序曲のようにルカによる福音の1-2章は、24箇所構成されて福音の導入部、序曲であって、福音の予告の役目を果たします。母マリアと息子のやりとりをもう一度聞きましょう。

「なぜこんなことをしてくれました。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」  
「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」

福音の他の箇所を読んでいたら、イエスの言葉にこの意味があるようです。

「父のところ」これが本来イエスのいるべきところ。

「当たり前だ」これが、「必ず～することになっている」。「どうしても～しなければならない」と訳されることもあります。典型的なのはいわゆる受難予告です。9章22節「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」。当たり前というのは、「神が定めたことであるから、そのことは必ず実現する」という意味のある言葉です。

お母様マリアは「これらのことをすべて心に納めていた」としか理解できません。イエスの誕生にまつわる話の中でも「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2章19節)とあります。時間が経ち、経験が重なった結果、マリアには理解の光が現れました。

マリア様が、心に納めていた「これらのこと」には、今日の福音箇所の神殿でのエピソードと「イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった」ということも含まれています。

イエスが両親の思いを超えた神の子でありながら、それでも両親に従って生活する。マリアはそこに神の不思議な計画を感じていたと言ってもよいでしょう。この場面について、とある司祭は、次のことを言いました。

「二人に仕えていたイエスは、人の子として両親と共に過ごすこと、人間として成長することの道を歩まれたのです。ナザレでの30年の生活は神様ご自身が人間と共に暮らすことによって人間の営みを味わい、理解するためにそれほどの時間をかけて人生という営み、苦しみ、喜びに大きな意味を与えられたと言っても良いと思います。」

私たちの人生の途上において、予告のようなエピソードもあります。人間のもつさまざまな感情つまり、喜び・怒り・悲しみ・楽しみを体験します。その時点の中で、理解しづらい経験もたくさんあります。分からないままで、人生を前進します。しかし、後、そのかつて受け入れ難い経験の意味がわかってきます。

教皇は、2025年の聖年のための書簡で次のことを語られています。

聖年の神の母は、希望のもっとも偉大なあかし人です。このかたを見ると、希望は中身の無い楽観主義ではなく、生の現実の中の恵みのたまものであることが分かります。どのお母さんもそうであるように、このかたはご自分の息子を見るたびに、その将来のことを考えます。神殿でシメオンからかけられたことばは、確実にこのかたの心に刻まれました。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。一あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」(2:34-35)。ですから十字架のもとで、無実のイエスが苦しみ死ぬのを見ている間、すさまじい苦しみにありながらも、主に対する希望と信頼を失うことなく、はいと言いつけたのです。

二つ目のテーマは、旅に出ること、巡礼することです。

聖家族のエルサレムへの旅に戻りますが、これはユダヤ人の毎年行う義務です。おそらく、過越祭に参加するための旅でした。行きは一週間、エルサレムの滞在は一週間、帰り道は一週間、今回の迷惑の行為によって遅れた一週間も含めて、聖家族の旅は、およそ一月もかかりました。

「時は、金なり」、これが私たちの価値観の一つです。無駄な時間と思われるかもしれませんが、巡礼のための時間を過ごしてまいりましょう。

教皇フランシスコは大勅書で、巡礼のことを次のように語られています。

「旅に出ることは、人生の意味を探し求める人の特徴です。徒歩(とほ)巡礼は、沈黙、苦勞、いちばん大切な物事、それらの価値の再発見に大いに有益です。」

何回も申しあげましたように、実際、私たちの生涯は、巡礼です。旅の途中では、定期的に休む必要があります。私たちキリスト信者にとって、その安息の日は日曜日です。日曜日は神によって「祝福」され、他の曜日と区別され、「主の日」とされる日です。ですから、主日のミサに定期的に参加しましょう。ミサにおいて、復活された主イエス・キリストは、みことばの光をくださり、また、疲れた心身のための栄養を与えてくださいます。いのちの源泉である主イエス・キリストから流れ出る恵みは、私たちを新たにしてくれます。

いちばん大切な物事や安息日の価値を新たに発見していきましょう。





## 2025年通常聖年「希望の巡礼者」の扉 開幕準備

聖年に向けて、カトリック司教協議会常任司教委員会から、昨年の11月「部分教会で執り行われる聖年の開幕式・閉幕式」という詳細な連絡書類が届きました。

そこには、各カテドラルには、聖年の扉を設けなければならないこと、開幕式の式次第、閉幕式の式次第の詳細が書かれていました。

まず、カテドラルでは聖年の扉を設置しなければなりません。これまで、特別聖年の際には、中央の扉に飾りを付けたりすることはありましたが、今回のような、25年ごとに行われる通常聖年に、このような指示が出されたのは初めてでした。こうして、仙台教区では、元寺小路教会と教区事務局を中心に、準備が始まりました。

今回、仙台教区では、扉だけではなく、アーチも作りました。

アーチには、ツタを絡ませ、ブドウと麦の穂をかざっています。これは、ミサで、私たちがいただくパンとぶどう酒のシンボルです。アーチをくぐって入るところから祈りと心の準備をしていくのです。扉は、幸いなことに、ガラス製です。これを利用して、聖ペトロ大聖堂の聖年の扉を模していく方向性で進みました。ですから、聖年の扉は、彫刻で造られています。専門家が撮影したフィルムの写真を使い、ガラス扉に貼っていきましました。大変美しく荘厳な扉ができあがりました。

開幕式の時、先頭に立って、この扉を開けるのは司教様です。これは教区のイメージを表すものから、その後が続いて入っていくのは、それぞれの奉仕職を果たす奉仕者とその後神の民全体が聖なる扉を通して入堂しました。大聖堂に入ってから洗礼盤において共同体として洗礼の約束を更新しました、新たな心でこの聖年を出発しました。



聖年の扉の前に、アーチがありますが、その右側には、「聖年の祈り」がきれいな額に入れられています。それを祈り、左側には、聖年の招きの言葉が、日本語、英語、ベトナム語で書かれています。聖年の招きを受け、「聖年の祈り」を唱え、扉をくぐるのです。聖年が、祈りと信仰を深めるよい機会となるように配慮されています。

聖堂内陣には、磔刑の大きな十字架が置かれています。

これらの聖年の扉、アーチ、磔刑の十字架は、聖年の1年間、ここに置かれています。

元寺小路教会は仙台教区のカテドラルとして毎月第一日曜日を「聖年の日」と定められています。その全てのミサには、ミサ参加者が、司祭と共に荘厳に入堂し、「聖年の歌」を歌うことになっています。

仙台教区事務局長

イグナシオ・マルティネス神父



# 光州(クワンジュ)大司教区と仙台教区 姉妹縁組結ぶ



仙台教区と韓国光州大司教区が姉妹教区になったことを前号でお知らせいたしました。詳細をお知らせいたします。

最初のきっかけは、平賀徹夫名誉司教と光州大司教区のキム・ヒジュン(キミジュン)ヒジノ名誉大司教様が、ローマに留学中、友人だった関係で、平賀司教が司祭の派遣を依頼したところ、「ローマで勉強して帰って来た新進気鋭の一番優秀な司祭を送ります」と、李錫神父様をお送りくださいました。

2023年11月、日韓司教交流会の後、光州大司教区の司教様が2人、仙台教区をご訪問くださいました。前々大司教のチェ・チャンム・アンドレア名誉大司教様と現大司教のオク・ヒョンジン(オッキョンジン)・シモン大司教様でした。

この仙台教区での親しい交流の間、お互いの信頼関係を深めることができ、ガクタン司教が、将来、光州に行くという約束をいたしました。

2024年11月に開催された日韓司教交流会の会場は、光州大司教区でした。その後、希望する司祭たちも交流会をすることが決まり、参加者はガクタン司教、平賀司教、小野寺司教総代理、イグナシオ教区事務局長、兪鍾弼神父、小松史朗神父、パトリック神父、ジャスティン神父、李錫神父の計9人が、11月18日から21日の4日間、光州大司教区の司祭団、本部事務局の司祭たちや職員に歓迎され、巡礼地に行き祈ったり、説明をしていただきました。

その実りとして、正式に光州大司教区と仙台教区が姉妹教区としての縁組が最終日に、締結調印されました。今後は、私たちが、共に歩み、互いに支え合い、交流を深め合うことになりました。李錫神父の司祭派遣の更新にも調印いたしました。色々なレベルでの派遣、司祭の派遣、信徒の交流、互いに祈り合うことも大切にしたいと思います。

皆様も記憶に新しいことで、まだご記憶になっておられる方も多いと思いますので、ご紹介いたします。

2024年12月29日(日)、全羅南道の務安国際空港で発生した旅客機事故。この務安での事故に際して、ガクタン司教は、すぐ光州大司教区のオク・ヒョンジン・シモン大司教様に宛て、「犠牲者となられたすべての人々の、永遠の安息を心からお祈りいたします。……光州大司教区の兄弟姉妹と仙台教区の教区民と共に今この悲しいときこそ祈りと連帯と兄弟愛のうちに一致したいと思っております。」とすぐにお便りをお送りしたのです。

ここで、光州大司教区をご紹介いたしましょう。

信者総数は、366,882人

(男性：152,822人、女性：214,060人)

この数は、人口の11.38%に当たります。

教区司祭は296人

大司教は4人

修道者は562人(男性50人、女性512人)

神学生は57人

小教区は141、巡回教区は79



今では大司教区に成長している光州大司教区最初の歩みは、1897年5月にパリ外国宣教会の司祭によって、モッポに最初の小教区が創立されたこと



に始まります。いま、このモッポには資料館が建てられ、教区の歴史資料が展示されていました。1933年には、コロンバン会の司祭たちが光州にきました。1937年に、光州使徒座知牧区になりました。1957年には、使徒座代理区になりました。1962年に、光州大司教区となりました。

仙台教区事務局長  
イグナシオ・マルティネス神父



光州大司教区の本部事務局の神父様たちとミサをささげました

## 「すべてのいのちを守るために」

……暴力(ハラスメント・性暴力など)の加害者になりえる私たち……

2024年10月28日(月) 午前10時から午後3時まで、上記テーマで「仙台教区司牧奉仕者のつどい」が仙台司教区センター1階信徒ホールで、仙台教区の司祭をはじめ、共に働く司牧奉仕者が28人参加し、カトリック中央協議会の「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」事務担当・喜代永文子さんが、①カトリック教会の動き、②暴力について考える、③加害者になりえる私たち、④すべてのいのちを守るために、と分けて講話と指導をした。

祈りに続いて、ガクタン エドガル司教が、「8月に行った原口先生の研修に続いて、今回のハラスメントについての研修は、生涯養成の一環として行うもので、仙台教区の司牧奉仕者がよく学んで、宣教司牧に励んでもらいたい」と挨拶した後、研修に入った。

①カトリック教会の動き——2013年、教皇庁に、「未成年者保護委員会」が誕生し、2016年、教皇フランシスコが「非寛容の原則」といわれる「性虐待に対して毅然とした対応をとる」ことを公表した。同年から「性虐待被害者のための祈りと償いの日」が始まった。2021年には、日本でも「祈りと償いの日」を始めた。

②暴力について考える——暴力の種類については、一番底辺に文化的暴力があり、その上に構造的暴力があるが、これらは、目に見えない形として存在している。それが顕在化したものが直接的暴力である。偏見・差別行為としても、先入観や偏見によって、また、能動的に差別行為をすることによって、潜在的におこなっていることになる。しかしこれらが顕在化すると暴力行為や殺人にまで至ることがある。

ここでは、特に、暴力について、自分たちのコミュニティでは、カトリック教会では、ということ振り返り、反省した。

③加害者になりえる私たち——次に、私たちが、直接加害者ではなくても、二次加害者になりう

る可能性を誰しももっていることに注目した。被害者が、被害を受けた後に、周囲のさまざまな人の言動によって、さらに傷付けられることについて、「二次被害を受ける」と言うが、この加害者になる可能性があるのではないかと。被害者の行為を非難したり、自分の価値観を押し付けたり、興味本位で事件の話聞きだそうとする、知り合いとそのうわさ話をするなど、これについては、正しい認識をもつ必要がある。

④すべてのいのちを守るために——ここでは「未成年者と弱い立場に置かれた成人の保護のためのガイドライン」を確認した。そして、すべての命を守り、寄り添うためには、だれもが、他者からの侵害に対して、回復する権利と力を持っていること。また、被害状況、その受け止め方、感じ方は一人一人違うので、一人で悩まず、適切な支援につなげていくことが必要であることが指摘された。

午後からは、小グループに分かれて、振り返りと分かち合いをした。午前中に聞いた講話への質問も含め、真摯に話し合いをした。

最後に各グループが発表した。配布された資料や、講話から、また例話から、「自分も例外ではないことを痛感した。決して、他人事ではないということ肝に命じた」ということも言われていた。

最後に、「寄り添える私たち：支援者から学ぶ」として、大事にしていることは、聴く姿勢。聴く姿勢とは、相談者にありのままを話してもらえ、その理解を深めていくことを大切にすることを強調されたお話でした。

仙台教区事務局長  
イグナシオ・マルティネス神父

# 各地区からのお便り

## 第1地区より

〈青森・下北ブロック／本町教会・浪打教会〉  
待降節の黙想

各神父様の講話(神様からのプレゼント)をいただき、感謝を込めて皆様と分かち合います。



### ①パトリック神父様 2024年12月1日(日)浪打教会

テーマ「信仰の再発見」。行きなさい。あなたの信仰があなたを救った(マルコ 10.48)。

信仰は望んでいる事柄を確認し、見えない事実を確認すること。初聖体勉強会の子どもや広島風お好み焼き店主の信仰表明のように、感じ、受け入れ、生きる。

パルティマイは信仰の模範。個人・共同体の祈りやミサで信仰の火を燃やし続ける(レビ記 6.5)。イエス様は、来臨(誕生=無限の愛)によって信仰と希望の火を再びつけてくださる(ルカ 12.49)。



### ②小松神父様 2024年12月8日(日)本町教会

テーマ「平和」。

救い主によってもたらされる平和は、戦争のない状態を指すのではなく、世界中の人間の持つ多様性を互いに受け入れること。イエス・キリストの指し示す福音は、相手に我慢を強いるのではなく、上下の関係では輝かない。持てる者から持たない者への差し出し(山が削られ谷が埋められる)。天分(タラント)を高め、他の助けのために自分を使うこと。天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず(福沢諭吉)。 松田 大(浪打教会)

## 第2地区より

〈岩手中部ブロック／花巻教会〉

聖堂改修完成記念ミサと祝賀会の報告

2024年12月22日(日)午前11時から、花巻教会聖堂改修完成記念ミサが、ガクタン エドガル司教様、第2地区長マルコ・アントニオ・デ・ラ・ロサ神父様、そして川崎忠紀神父様をお迎えして行われました。

参列者は花巻教会の信徒35人と合わせて50人が出席。第2地区の来賓として四ツ家、志家、盛岡上堂、北上、水沢、



遠野、釜石の7教会の代表者、宮古教会からは、お祝いのメッセージが届きました。

ミサ聖祭では、入祭の歌「しあわせなかたマリア」から閉祭の歌「マラナタ」まで8曲を歌いましたが、司教様の感想では、声が揃って、元気があって良かったとのこと、内心うれしく思いました。

花巻教会の信徒のうち参加した15人は、ベトナムからの若い信徒で、司教様を迎える準備として、外のもみの木にクリスマスのイルミネーションを、玄関の低木にもイルミネーションを、そして祝賀会場のホール舞台にもクリスマスツリーを立て、イルミネーションを飾り付けてくれました。

ミサ後、司教館からホールへ移動して祝賀会を開催しました。花巻教会信徒会長として、私、小田代が司教様をはじめ皆様に感謝の言葉を述べました。

思わぬ恵みとして盛岡の旧ドミニコ会口ザリオの聖母修道院様から、新聖堂の椅子をご寄贈いただいたことにも感謝を申し上げます。

さて、当教会は、スイス出身のゲーヴィレル神父様が初代主任司祭として、1955年に献堂された教会で、2025年で70周年を迎えました。

今日の良き日を忘れず、司教様の説教で語られたシノドスの精神を生かして、私たちは派遣されたものとして福音宣教の活動をし、新しい聖堂の椅子が埋まるよう働きかけてまいりますと誓いました。

小田代 将正(花巻教会信徒会長)

## 第3地区より

〈宮城北部ブロック／古川教会〉

待降節の黙想会開催

2024年12月1日(日)に、石巻教会と古川教会の初めての合同黙想会が古川教会で開かれました。

ヴァレラ・ミゲル神父様の司式・ご指導で10時30分のミサから始まり、聖体賛美式、ゆるしの秘跡。





ゆるしの秘跡のあいだ、他の方たちは与えられた聖書の箇所を読み、新たに気が付いた事、ことば、など心に残ったことを沈黙のうちに黙想しました。昼食をはさんで、ミゲル神父様のご講話。その後解散となりました。

参加者38人が、聖堂の静けさの中で、自分の悔い改めや、待降節の意味を深く考える機会に恵まれました。

昼食時の楽しく温かい雰囲気にも包まれ、今後の四旬節の黙想会へと歩んでいきます。清水 由紀（古川教会）

## 第4地区より

〈カテドラルブロック／元寺小路教会〉

待降節はじまりの祈りのつどい・

イルミネーション点灯式

待降節が始まる前日、11月30日(土)18:00から元寺小路教会大聖堂前広場に約200人が集まり、教会の壁面を飾る聖母子像のターポリンシートとイルミネーションの点灯式が行われた。



最初に聖歌「天よ露をしたたらせ」が歌われ、ガクタン エドガル司教、イグナシオ・マルティネス神父、高木健太郎神父の司式で、厳かに始まった。式の最後にカウントダウンがはじまり、一斉にライトが点灯。暗闇の中に明るい光が照らされた。

今回は、元寺小路教会聖歌奉仕グループとともに仙台白百合学園小学校合唱クラブや聖ドミニコ学院小学校合唱団の演奏も加わり、おごそかな祈りの集いとなった。私たち信徒にとっても、教会の外を通る方たちに向けて、主の御降誕を迎えるふさわしい式となった。

関 毅（元寺小路教会）

## 第5地区より

〈中通り北ブロック／野田町教会・松木町教会・二本松教会〉

第5地区の聖年ミサ

第5地区の聖年ミサが1月4日、野田町教会において、ガクタン司教様の主司式でささげられました。共同司式で第5地区長の佐藤修神父様、浜通りブロックの幸田和生司教様、仙台から川崎忠紀神父様、中通り北ブロック担当のマチアス神父様、仙台教区ベトナム人司牧担当のドミニク神父様も共にミサをささげられました。ガクタン司教様のお話では、カテドラルでの聖年開幕ミサに次いでこの聖年ミサということでした。



ガクタン司教様と共同司式の司祭の方々

仙台教区の巡礼教会である野田町教会では、巡礼者をお迎えるためにフラッグや聖年ロゴを大きくしたものを聖堂内に飾り、巡礼記念のしおりを作って準備を整えてきました。またベビールーム



第5地区・聖年の大きなロゴマーク

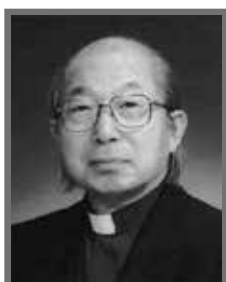
では、「イエス・キリストの生涯」のテーマで16枚の絵画を展示しています。この絵は松木町教会信徒の鈴木教弘（のりひろ）氏が描き続けてきた絵と今回のために新たに描かれた絵で、それぞれに聖書の箇所と祈りのことばも添えられており、黙想にもなります。巡礼に来られた際には司祭館まで「絵を見たい」とお声かけください。5月以降は世界のマリア様の御像や御絵等の中で祈れる場所も準備する予定です。

仙台教区の皆様が聖年の大きなお恵みをいただけますようお祈りしております。

渡邊 祐子（野田町教会）

## 訃報

### アロイジオ 土井 勝吾（どい しょうご）神父 帰天



〈略歴〉

1938年10月1日 宮城県女川町生まれ  
1969年7月5日 元寺小路教会にて司祭叙階  
1970年～2017年

以下の教会、幼稚園において宣教司牧活動に従事する。  
八戸塩町教会、大湊教会、野辺地教会、亘理教会、気仙沼教会、  
角田教会、元寺小路教会、築館（新生園）教会、一関教会、  
千厩教会、米川（大籠）教会、盛岡地区、石巻教会、  
地区制：第5・6地区

野辺地カトリック幼稚園園長、気仙沼カトリック幼稚園園長、

大湊カトリック幼稚園園長、  
田名部カトリック幼稚園園長、  
角田カトリック幼稚園園長、  
愛心幼稚園園長、  
築館聖マリア幼稚園園長、  
石巻カトリック幼稚園園長

1972年～1976年 教区会計 補佐  
2017年 引退（司祭の家）  
2025年1月24日 帰天 86歳

# 2024年 仙塩地区婦人連合会黙想会 シノドス 2021-2024 を終えて

11月19日、会員約90人が集まり、2024年度の仙塩地区連合婦人会(あけの星会)の黙想会が、元寺小路教会大聖堂で開催された。

朝10時から、開会の祈りの口ザリオー連のあと、挨拶、講師紹介の後、すぐ講話が始まった。

指導司祭は、幸田和生司教。  
テーマは「シノドス2021-2024を終えて」

講師が準備された資料を見ながら講話を聞いた。



## シノドス(世界代表司教会議)とは？

Synodos は「syn(共に)」と「hodos(道)」の合成語である。つまり、「共に歩むこと」を意味している。

第二バチカン公会議は、1962年～1965年まで、全世界の司教が集まって話し合った大変大きな会議であった。大勢の司教たちが全世界から集まるのは大変だということで、何年かごとに、ある重要なテーマを教皇が諮問し、各地域の司教が代表して出席し話し合い、その討議のまとめを教皇に提出し、教皇はそれを、使徒的勧告という形でその答申に答えたのである。

使徒的勧告の有名なものは、パウロ6世の使徒的勧告『福音宣教』(1975年)。これは、福音宣教する者にとって、とても大切な文書で、皆様もぜひ目を通されると役に立つものだと思う。

もう1冊は、教皇フランシスコの使徒的勧告『福音の喜び』(2013年)である。これまでの使徒的勧告とは違い特殊な形で出されたものである。2012年、教皇ベネディクト16世は、「新しい福音宣教」シノドスを開催されたが、その討議のまとめを、出席者はベネディクト16世教皇に答申した。しかし、教皇は、2013年2月に引退した。その後継者としてのフランシスコ教皇がシノドス提言に答えたものとして、自分が考えている宣教についての全てを含んだ『福音の喜び』が出された。

## 第16回シノドスについて

教皇フランシスコは、第16回シノドスと呼びかけた。このシノドスは、これまでのシノドスとは非常に違った。その特徴としては、3点挙げられる。

1. 長いこと。2021年～2024年までかかった。
2. 総会は2023年と2024年の2会期に分けた。
3. テーマは「シノドスそのもの」であった。  
テーマ「共に歩む教会のために、交わり、参加、ミッション(宣教)」  
初めから、全世界の教会から声を集めようとした。皆の参加を呼びかけた。  
すべての信者に、参加するように呼びかけた。

このために、世界中の信徒に10項目の質問をした。しかし、日本の教会は、コロナの影響を受けた。2011年は、そのため、教会でシノドスについて話し合うことができなかった。その面で、私たちはシノドスに参加したという意識を持っていない。これは残念なことである。

教区事務局で教区の意見をまとめた。

↓

各教区が出したものを、国別の司教協議会がまとめた。

↓

バチカンのシノドス事務局がそれをまとめた。

↓

各国の司教協議会へ渡された。

↓

大陸別ステージ(2023年春)

会議で意見をまとめ、報告書が出された

↓

シノドス総会 第一会期(2023年10月)

↓

各教区、専門家による検討

↓

シノドス総会 第二会期(2024年10月)

総会は、皆様が報道などでご存じのように、日本人の参加者である西村桃子さんが議長団の一人に選ばれ、活躍された。この時の会議場も、パウロ6世ホールという広いホールで、そこに円卓が並べられ、言語別にメンバーが組まれ、話し合う形がとられていた。

第一会期が終わった後、まとめが出された。シノドスでの話し合いを実践し、それを発表するように、ということであった。

仙台教区では、昨年、第一会期が終わった後、司祭団の会議に西村桃子さんを招き、「霊における会話」の体験をした。また、昨年の7月には、シノドス講演会をした。

世界中で、「霊における会話」がされた。第一会期でなされた内容を見て、もっと神学的に研究しなければならない、という意見が出されていた。



第二会期が2024年10月2日に開かれ、10月27日に最終文書が発表された。最終文書は、155項目について、355人の投票権のある参加者たちの3分の2以上の賛成によって採択された。

今回のシノドスは、教皇がこれに手を加えず、そのまま最終文書として出すと決められたので、使徒的勧告としては出されない。しかし、この文書がそれに相当する大切なものだ、と教皇はおっしゃっている。

## 最終文書の内容紹介

5項目に分かれている。

### 1. 聖霊によって回心・転換へと呼びかけられる

教会が転換を呼びかけられている。教会が変わっていかねばならない。

シノダリティの精神はなにか。「共に歩むことは教会の本質である」。

洗礼によって、すべての信者は聖霊の働きを知っている。信仰の感覚を持っている。だから、キリスト信者は、間違えることはない。

信者全体は間違えることはない。聖霊の働きがあるから、ミサも司祭一人がささげているのではない。そこには多重性があり、一致がある。オーケストラのイメージが一番ピンとくるでしょう。教会が共に歩んでいるイメージはこれだ。

今の社会は分断している。バラバラになっている。その中で、キリスト者が一緒に歩むことができたのは、すごく大きなメッセージがある。

### 2. 関係の転換

これは、私たち同士の関係を変えていくということ。

シノドスが始めから言っていることは、皆で行う、ということ。つまり、誰一人除外されない、ということ。——これは、教会が今まであまりしなかったことではないか。私たちの関係が変わっていかねばならないことである。

「虐待の問題」は、ヨーロッパや北米でこの問題が大きかった。

排除され、疎外されている人々の声に耳を傾けなければならぬ。

私たちの教会が、歴史において、宗教間の対立や争いによって、宗教自体の信頼性が損なわれてきた。だからこそ、全ての人が「共に歩むこと」が大切である。

女性の問題については、「女性が助祭の職務に就くことができるかどうか」という問題は、未解決のままです。この識別は継続される必要があります」(60)と書かれている。シノドスの中で、大きな問題として感じられたことは、女性が叙階を受けることはできないのはどうしてか、ということにつ

いては、未解決は未解決のまま提示されている。皆が参加できる教会になるために、問いかけられている。

教会における奉仕職についても、大切なこととして、問いかけられている。これは「聖職者主義」の克服、これを克服しようとするのが根底にある問題である。聖職者を特別な人として扱おうと、聖職者が「自分は特別だ」と思い、「自分は何をしても許される」という間違いが生じうる可能性がある。

### 3. プロセスの転換

識別、意思決定、説明責任が大切である。

・**識別のプロセス**——第一会期の間、「霊における会話」として取り上げられた。

「霊における会話」が行われたことは、画期的なことであった。

「霊における会話」とは、聖霊の中での会話、祈りの中での会話である。

祈りの心を持って話し合うことが大切。祈って、神のみ旨は何かを考えて祈っていく、祈って話す、聞く人も祈って受け止めていく。

聖霊は私たちをどこに導こうとしているのか、ただ単にここで、最小の一致をしたということではない。

「私たちの心は燃えていたではないか」というエマオの弟子が感じたように、決定が全体で受け入れられるように。自分の意見は違うがその決定のプロセスに参加していたし、受け入れなければならない。簡単なことではない。

お互いが聖霊を求めながら話していく。教皇フランシスコは、教会だからできる、と言う。必ず、共通の聖霊の導きが分かるはずだ。これが識別のプロセスである。

・**意思決定のプロセス**

神の民全員が可能な限り、そこに参加するように！たとえば、司牧評議会、宣教司牧評議会。

教会法には、経済評議会と司牧評議会が各小教区にはなければならぬ、とある。

教会が大切にしている一つのことは、経済問題である。

もう一つのことは、羊飼いの仕事である。司牧というと、経済問題以外の全ての羊の世話に関することが入る。

大原則は、司教や司祭の権威と民の同意を成り立たせなければならぬ、ということである。

教皇フランシスコは、今回のシノドスで、最終文書をこれは、皆が出した意見なので、それで私もOKだと言った。

これから、小教区でも教区でも、そうなるだろう。

去年、地区制で、司祭は担当司祭ということであっ

た。信者にその人が主任司祭ということがよく伝わっていないのではないか。担当司祭と一緒に、意思決定をしていかなければならない。

・透明性、説明責任、評価

未成年者、弱い人々、女性を大切にしなければならない。

・メンバーの人も大切

社会の周縁で暮らす人々も参加できるように。

#### 4. 絆の転換

若い人々は、伝統的な小教区のつながりよりも、SNS でつながっている。

小教区にも意味がある。さまざまな集いにも意味がある。

賜物の交換——よいものとして、互いに交換していかなければならない。

#### 5. 民の形成

これらすべてを実現するためには、どうするのか。若者、子ども、奉仕職候補者、神学生、修道会志願者。

#### まとめ

- ・このシノドスは出発点
- ・今回のシノドスの目指したものでしたら、皆が参加できるか。
- ・司牧評議会が、小教区にできたらよいか
- ・「だれも排除しない」ことを根本的な姿勢として評価する
- ・祈りの中で会話する。  
これでは、何も決められないのではないかと、心配する人もいる。
- ・女性の問題は大切で、大変な問題である  
今、カトリックでは女性の司祭が生まれたら、多分分裂するでしょう。保守派の人も排除できない。
- ・ミッションを強調することは大切である。  
そこから、「共に歩む」ことがはじまる。  
どんなかたちで、仙台教区に影響をおよぼしていくか。
- ・高齢化が進む中で、その人と共に歩いて行けるか。
- ・「共に歩む」というテーマがあり、それを生きていかなければならない。  
永遠に続く問題である。

Sr. 長谷川 昌子（仙台教区広報委員）

## 2025年通常聖年 巡礼のしおり

仙台教区では、各地区ごとに1か所の教会ならびに殉教地と殉教碑の計7か所を聖年巡礼地として指定しています。

(前号の仙台教区報にも掲載しています。)

皆さんが巡礼される時に、使用できる「巡礼のしおり」を発行しました。「聖年の祈り」のほか、「ガクタン司教の招きの手紙」(日本語・英語・ベトナム語)、「行事の予定」、「免償」について、「各巡礼地の場所」

の案内が書かれています。各巡礼地を訪問した時のスタンプを押すスペースもあります。ぜひご活用ください。



聖年の公式マスコット「ルーチェ」



#### 編集後記

昨年、韓国光州大司教区との姉妹教区が調印され、仙台教区にとって心強い仲間が増えたようですね。互いに尊重し祈りを共にして、希望を持って聖年の旅を続けて行きたいと願っています。

仙台教区広報委員会では、皆様から原稿を募集しています。投稿は随時受け付けていますので、下記のアドレス宛てにメールで添付ファイルでお送りください。手紙の場合は教区事務所宛てに郵送してください。(関 毅)

c-hasegawa@blue.ocn.ne.jp 次号発行予定日：5月1日(木) 原稿締め切り：3月16日(日)